
オオクニヌシノカミ様をお願い！！！！

中田 中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオクニヌシノカミ様にお問い合わせ！！！！

【Nコード】

N57080

【作者名】

中田 中

【あらすじ】

しのだまき

篠田珠生は、縁結びで有名な神社で巫女のバイトをしている、気の抜けた口調が特徴的な女子大生。

なかなかの美人だが、中学・高校・大学が女子校のため男性と出会うチャンスがなく、恋人いない歴〃年齢。チャンスがあっても恋愛対象として見れずに、交際をお断りしてしまう。

恋愛に対する憧れはあるにはある。だけど機会があれば彼氏が欲しいなあ程度の意識+本人が細かいことを気にしない、おおらかでのほほんとした性格のため、彼氏ができる可能性はかなりの低さ。

そんな彼女の働く神社に、一人の超絶美形の女性？ いや！ オカマのおねえさんがやってきて・・・。

ブログ（前書き）

- 1、誤字脱字がありましたらご報告お願いします。
- 2、作者はずぶのド素人です。
- 3、作者はびっくりするほどうたれ弱いです。取扱いにはご注意ください。
お願いします。
- 4、ほめてもらえたら泣いて喜んで調子に乗ります。

ブログ

今日はなかなか心地が良い天気だ。ポカポカして眠くなる。

御祈祷の受け付け、案内もさつき終わらせただから、境内の建物の中でんびりと参拝客の方が何か買うのを待つ。

なんて楽なバイトなんだ。今は年末年始のかきいれどきの時期ではないから忙しくないし、冬ではなく春だから袴でも寒くない。良い季節だ。

巫女さんのバイトは年末年始の短期募集が多い。だけど、私が働いているこの神社はちよつとした観光スポットなので、年末年始以外の平日も何人かの巫女さんが求められている。

超有名なお寺や神社には敵わないけれど、適度に参拝客がいるこの神社はバイトをするにはピッタリだ。

しかもバイト料・・・じゃなかった。『神様からの御礼』もなかなかよろしいときた。

基本は日給制だが、巫女のバイトとしては珍しく午前と午後に分れている。流石にシフト制は無理みたいだけ。

ちなみに、巫女巫女言ってるけどホントは私たちみたいなのは助勤じょきんっていうんだよねー。

私もこのバイトに応募するために、調べて知ったんだよね。

「今日はいいい天気！ポッカポカ！」

なんて素敵なおバイトに合格できたんだ。ホント神様有難う御座います。

けどちょっとした不満もある。この神社、特に縁結びが有名なのである。

祀つてある神様のなかで、オオクニヌシノカミという色々つかさどつてる神様がいるんだけど、その神様は縁結びも司っている。

「すみませ〜ん！このピンクの縁結びのお守り二つ下さい！」

「こちらのお守り二つでよろしかったですか？」

「あつ、はい。」

「はい、どうぞ。ありがとうございます。」

そう、この神社やたらとカップルやらなんやらが多いのである。この十九年間、つまり生まれてから今まで彼氏なしの私に対するどんな嫌がらせ？

「あゝあ、さっきの二人もラブラブだったなあ。あのお守り二人でお揃いにするんだろうなあ。」

「それよりも、私は珠生^{たまき}ちゃんが今までなんで彼氏できてないのが不思議なんだけど。」

「真由美さ〜ん、だから何度も言ってるじゃないですか〜。ホント

びつくりするくらい出会いがないんですよ〜うう〜。」

先輩巫女さんの真由美さんが呆れたように話かけてくる。

「ホントに？まったく？」

「・・・・・・チャンスがあってデートを何人かとしても、女友達と遊んでるほうが楽だな〜楽しいな〜って思っちゃうんですよ。男の人とのやり取り、なんかめんどいつていうかなんというか・・・。だから告白されても断ってきたんですよ〜。」

「要するに、好きっていう恋愛感情を抱けないってわけ？」

「ん〜そんなカンジでえ〜す。恋人同士とか見たりすると、やつぱりうらやましいなあって気持ちは起きるんですけど、別に彼氏いないと無理って人じゃないんで〜。それよりも恋がしたいです〜。」

「珠生ちゃんと話してるとほんと力抜けるわ。そうね、まず男としてみれる相手が現れてくれなきゃね。」

真由美さんは少し疲れたように、机の上に身体をあずける。

確かに友達からも、あんたとしゃべっているとペースや口調がつかれてしまつて、どんな話題でもほのぼのお花畑ルンルン状態になると言われたな。

「ちよつとお〜！真由美さんさばらないでくださいよお〜！！！！」

オオクニヌシノカミ様、恋ってどんなものですか？

プロローグ（後書き）

駄文お読み下さり、ほんとうにありがとうございます。

質問：綺麗なおねえさんは好きですか？ 答え：いいえ、彼女は男です。

言葉を無くすとはこのことか。

全ての賛美は、このお方の為にあるのだと言っても過言ではないその美貌。

もはや男と女というより人間を超越したな。同じ人類とは思えん。
真由美さんなんか固まって動いてないし。面白〜い。

「この縁結びのお守り、一つくださる？」

「うわぁ〜おねえ〜さん綺麗ですねえ〜。今まで見たことないくらい綺麗なんで、一瞬固まっちゃいましたよ〜。はい、このおまもりですね〜。四百円になります。」

ロングの黒髪ウィッグに、180センチ後半、もしかしたら190超えてるかもしれない長身。

女のような丸みはないが、綺麗に筋肉がついている少し細身の体にはタイトなドレスをまとっている。

顔は少し彫が深めで左右対称、どのパーツも美しいだけでなく素晴らしい位置にピタッとおさまっている。筋の通った高い鼻、切れ長な美しい二重の目に長いまつ毛、適度に肉付きのいい魅惑的な唇、卵型の輪郭に絹の肌。

決して女らしいわけではなく、明らかに男だとわかるその容貌。イケメンではない！断じてイケメンという軽々しいものではない！！このお方は『美』だ！！このお方！！『美』、『美』！！このお方だ。しかも美形は声まで美形なのか。腰にゾクゾクくるエロエロ低音ボイス。

てか、フェロモンダダ漏れ。お色気の蛇口全開じゃん。もったいな

いからお色気の蛇口もうちよつと閉めてください。

んっ？あれっ？男？・・・・・・・・この人の美貌にすっかり流されたけどこの人男じゃ〜ん。

今気づいたよ。オカマさん？でもこんだけ綺麗なら、男も女も老いても若きもより取り見取りなんだろうなあ。

すっごい恋愛経験値高そう。

「千円からお願いできるかしら？」

「はい、千円お預かりいたしますね。お釣りの六百円です。お守りどうぞ。」

「・・・・・・・・あなた凄いわね。今まで私を見た人たちの反応と全く違うわ。」

「ええ〜、これでもすっごくビックリしたんですよ！！今でもおにいさん？おねえさんにドキドキしてますよ〜。」

「まったくそうは見えないけど・・・・この姿のときはおねえさんの方が嬉しいなあ。ねえ、あなたお名前は？」

おに・・・・おねえさんは口の両端を少しあげてサディスティックに微笑んで名前を聞いてきた。

クソッ！なんでこんなにサド笑いが似合うんだ！

「私ですか？篠田珠生と言います。」

「たまちゃんね。可愛い名前。歳は？」

「たまちゃん？19歳ですよ。」

「あら、大学生かしら？私も大学生なのよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？

今なんか、一瞬だけちよつと耳が遠くなつたみたい。

「えつと、なんておつしゃいました？私の耳がおかしかったみたいなんで大学生と聞こえたんですけど？」

「あら、よく聞こえてる可愛いお耳じゃない。私も大学生って言ったのよ。大学3年の21歳よ。」

最後のおまけにおねえさんはウインクを一つバチンと私にしてきた。

「ええ〜つつそだ。」

「うそじゃないわよ。なんなら学生証見せましょうか？」

「見たいです！！！」

「ウフフ、いいわよ。」

ハンドバックをあけ財布をごそごとあさると、日本最高峰の大学の内の一つの名前が書かれた学生証をみせてきた。

何この美青年。髪形が茶髪でショートカットのおねえさんだ。

カードには目の前のおねえさんにソックリな、ちよつとワールドでDSくさい超絶美青年がそこにおさまっていた。

名前は・・・。

「大河内仁？この写真の人がおねえさん？」

「そう、それが私。でもその姿の時はおにいさんね。」

「なんか名前までごっついですね。てかおにいさんとおねえさんや
つてるとかせわしいですね。K大学の法学部ってことは将来は
弁護士さんですか!」

「男の時は仁って呼んで頂戴。今は、ひとみって呼んでね。うゝん、せわしないかしら？ ホントは理系も考えてただけど、ほら理系って忙しいでしょ？ 女装する余裕がないと思ったから文系にしたのよね。法学部がみんな弁護士になるとはかぎらないわよ。」

「仁さんはオカマさんなんですか？」

「ズバッと聞くわね。ただ女装が好きなだけよ。オカマじゃなくてバリバリの男。」

「へえ、へえ、へえ、へえ、へえ、へえ、へえ、へえ、へえ、へえです。」

私は机を叩いて、人気だった某テレビ番組の真似をする。

すると仁さんは、むすつとして怒ったような表情になった。美形が怒ると怖いってのはホントだなあ。

「8へえって少ないじゃない。もうちよつとぐらいいつてもよくない？例えは・・・そうね14、5へえぐらい欲しいわね。ちなみに、心も体も男だからホモじゃないわよ。」

「へえへえへえ。１０へえ。」

「えー、採点厳しすぎない？」

「これでも譲歩しましたよ。趣味なんだ、フーンぐらいな感じで
すよ正直。へえへの字も無いくらいです。単位がフーンなら１
２フーンぐらいいいきましたね。おしかったですね。」

「・・・あんまりかわってない。・・・たまちゃんはここで働いて
るの？」

「ばいとですよ、隣のこの方も私の先輩です。」

ちなみに、隣の真由美さんは未だに解凍されていないみたい。

「こんにちは。って駄目ねえ。かたまっちゃってるわ。それよりた
まちゃんは、次このバイトに来るのはいつ？」

「明後日の午後からですよ。」

「わかったわ。明後日また来るわね。またね、たまちゃん。」

「えっあっはい？」

しゃべりたいたけしゃべって、仁さんといひとみさんは髪をなび
かせて颯爽を帰って行った。

あの人と長話してしまったせいで、何か買おうと思っていた参拝客
の方々が固まってしまっている。

「みなさん大丈夫ですか？」

私の一言に、みんなはじかれたように動き出した。夢を見てるみたい頬を染めてぼおっとしてるか、興奮したように勢いよく彼の美貌について語っているかの2パターンだ。

真由美さんもぼおっとして使い物にならない。いつもは頼れる本物のおねえさんののに。

「ちよつとお〜！真由美さんさばらないでくださいよお〜！！！」

オオクニ又シノカミ様、どんだけあの人八百万の神様に愛されちゃってるんですか？

質問：飲み会とは合コンのことですか？ 答え：はい、飲み会は合コンです。

主人公じつは結構駄目人間で腹黒かも・・・。

質問：飲み会とは合コンのことですか？ 答え：はい、飲み会は合コンです。

「そついや昨日ねゝ死ぬほどすごい美形の女装趣味のおにさんに会ったんだゝ。」

「女装趣味の美形って・・・まあそれよりあんたが褒めるなんてほんと珍しいね。あたしらがかつこいいとか可愛いとか言ってる人でもかなりキツイ診断してるじゃん。」

「みんな髪形と服と雰囲気には騙されすぎゝ。特に女の子なんて化粧とは言えないレベルの特殊メイク技術を持ってる子とかざらだしねゝ。輪郭が普通なら後はなんとかごまかせるからねゝ。」

いつも講義には10分から15分は遅刻する相田教授が来るまで、お友達の美咲ちゃんと一緒にダラダラとおしゃべりタイムだ。4時間目ってだれるわゝ。

みんながイケメンって言ってる芸能人だって、黄金比率とかパーツとかでみたらそんなにかつこくないと思うのにみんな雰囲気がかつこいいと思ひ込んで流されちゃってるよゝ。

女の子なんかもう特にすごいすごい。

「ねえ珠生。あんた今日暇？」

「んゝ？バイトなくてゴロゴロするから暇じゃないよゝ。」

「よしっ！今日の6時半に駅前集合ね。他大の男の子たちと飲み会するから。」

「それは飲み会という名の合コンですか？」

「そうともいう。美奈子が幹事。」

美咲ちゃんは携帯をみて、何か確認しているみたいだ。たぶんさっきの合コンについてだろう。

「私、暇じゃないっていった。」

「ゴロゴロするんだったら暇でしょ。てかあんた最近、ほんとに彼氏どうにかしないと。それに美奈子に珠生も行くつもり送っちゃった。」

そういつて送信し終わった携帯の画面をこっちに向けてにやにやしてくる。

「えゝみなちゃんに行かないって今から送るし。それにゴロゴロダラダラは大切な休息タイムだから暇じゃない。無理して彼氏作らなくていいよ。好きでもなかったらめんどいだけだし。」

美咲ちゃんや他の友達はこのゴロゴロタイムの大事さを全然わかってくれない。

独りは嫌いだけど一人が好きな私は、今それほど彼氏が必要なわけじゃないんだよ。好きな男の人ができて、その延長線でその人と付き合えたらいいなあてだけなんだよ。

『彼氏』って名前が欲しいから男の子と付き合いたいんじゃないんだよ。

「付き合ってみたら好きになるかもしれないじゃん。ねっ！それに

今日は美奈子の他の友達も二人来るらしいけど、あたしその子たち知らないから不安なんだよね。だからついてきてよ。」

「結局それが本心？」

「そうともいう？」

6時20分。私は結局駅前にいた。

なんだこの敗北感。でも来なかつたら来なかつたで、私は悪くないのに変な罪悪感に苦しめられるんだよねあ。

少し向こうに見慣れた姿が手を振りながら近づいてくる。

「珠生ちゃん！！みんなはまだみたいだね。」

「あゝみなちゃん、うんまだ私だけみたい。」

「珠生ちゃんが来るなんてめずらしいね。サークルが一緒の大学の男の子がね、どうしてもしてくれって言うから。」

「うん、まあね。いい人がいたらいいね。」

「そうだね。あつ！来た！こっちこっち！！・・・珠生ちゃんこの二人知らないよね。紹介するね。こっちが山口知美でこっちが宮内ありさ。知美、ありさ、この子が篠田珠生だよ。」

集合場所に来たみなちゃんの友達を紹介してもらつ。右から、さわやかな清楚系のともみちゃん。守ってあげたくなる可愛い系のありさちゃん。

顔は・・・すっぴんにしたらともみちゃんのほうがいいだろうな。2時間かけたナチュラルメイクじゃなくて、ホントに薄付きメイクみたいだし。

ありさちゃんは目の周りをアイライン引きまくってつけまつげバツサバサだし黒目が大きく見えるコンタクトしてるしな。

目のでかさでと髪形と洋服で可愛いって錯覚を引き起こそうとしてるみたいけど、私の前ではそうは

問屋がおろさないよ！！！！

「はじめまして。珠生ちゃんでもいいかな。私のことは好きに呼んで。」

「

「はじめまして、ありさです！珠生ちゃんって呼ぶねえ。」

「はじめまして、よろしくねともみちゃんとありさちゃん。」

なんだろうこのありさちゃんに対するデジャヴュは・・・。。
なんか似てるぞ。

「あつ！みさきちゃんもきたね。」

「ごめん！みんなもうそろってるんだよね。」

その後、また同じように自己紹介をして、男の子たちとの集合場所へ向かう。

その時みなちゃんと話していたみさきちゃんがこっちにやってきた。

「ねえ珠生。」

「なあにみさきちゃん？」

みさきちゃんにつられて、ついついこつちも小さい声になる。

私の耳に顔を近づけ、みさきちゃんはちらりとありさちゃんを見てより声のボリュームを落して話し出す。

「あの子、ありさちゃんだけだよ……。」

「うん。」

「しゃべりかたとかあんに似てるじゃん？しあかもあんたの好きなaxesの服で全身きめてるし……でもなんかぶりっこに見えるし……あんだじゃ全然そうは思えないのね。それからさ、美奈子本当はありさちゃん誘うつもりはなかったんだって。」

「私もなんとなく自分にてるなあて思ってたんだ。でもなんでみなちゃん誘うつもりはなかったのにいるの？」

「知美ちゃんにを誘ってたときに、全然仲良くない別グループのありさちゃんがいきなり『ありさもそれ行きた〜い！！ねっ、いいで

しょ?』って言うて半ば無理やりだったらしい。」

「うわぁ、なんかこなきゃ良かったよぉ。みさきちゃんのアホ馬鹿!」

「ごめんって。私もその話聞いてちょっと後悔してるわ。」

「めんどくさい合コンになりそうだなぁ・・・。」

オオクニヌシノカミ様、恋はルール無用の戦なんですか？

質問：綺麗なものは？ 答え：棘がある。（前書き）

珠生は怒りを溜めて溜めて溜めまくって一気に出す、なかなか怒らないひとです。

でもその分キレたらやばいです笑

質問：綺麗なものは？ 答え：棘がある。

「ええ！！！そおなの！！！拓海君すうごおい！！！」

私もここまで凄いしゃべり方はしないぞ・・・たぶん。

処代わって居酒屋で合コン中。けどなんだかこのありさちゃんは私に對抗意識があるらしく、闘気むき出しで私を貶め邪魔してくる。どんだけ私につっかかってくるんだ。

5人の男どもも、ありさちゃんにデレデレで完全に私のことなんか空気、それどころかあまり良い印象を持ってないようだ。

ありさちゃん以外の3人の女の子はありさちゃんと男の子たちになりご立腹だ。

「ねえ、珠生ちゃんはおなの？」

「ん、え？私？そ～だな。家でまったりゴロゴロダラダラしてるかな。」

「あゝ、それっばい！おばさんみたいにだらだらしてそう！！珠生ちゃんって着やせするからごまかせていいよね。てか、しゃべり方もなんかそういう性格でてるよねえ。なんか馬鹿っぽいていいうかあ？私い、珠生ちゃんみたいに家でゴロゴロしてたりしたらさみしくて死んじゃう！！！」

こいつ早死にしたいのかな？

この馬鹿男たちもどこに笑う要素があつたかな？

「あずさちゃん、さつきから思ってたけど失礼だよ。さつきから珠生ばかりに。珠生はマイペースでまったりするのが好きなんだよ。それに珠生は多趣味だよ。小さいころからお茶とお花やってるし、絵だってできるし音楽だって、ダイビングだってやってるんだよ。今日初めて珠生にあったあずさちゃんが珠生のことどうこう言わないでほしい。」

私の代わりにみさきちゃんが怒ってくれた。みさきちゃんは短気で怒りっぽいから、とても優しく言っただと思う。
ありがとう、みさきちゃん。

「やあだあゝ、みさきちゃん怖いゝ。あずさ冗談のつもりだったのにそんなこといわなくてもあゝ。」

「みさきちゃんそう責めるなよ。あずさちゃんも冗談のつもりだったし、珠生ちゃんも怒ってないだろう？」

「そうそう、あずさちゃんはワザとそんなこと言うタイプじゃないよ。」

もう駄目だ。我慢できない。
スカートを掴んだ手に力が入りすぎて白くなる。

「おい、お前らしい加減に・・・。」

「たまちゃん昨日ぶりだね。」

この声は！？昨日聞いたエロエロ低音ボイス！！
まさか、まさか！！！！

ギギギツと錆びついたロボットのよう^に首を後ろに回す。
もう周りの反応で誰が後ろに立ってるかわかる。

「仁さん……昨日ぶりです。なんでここにいるんですか？
ってか今日はおねえさんじゃないんですね。」

昨日見た学生証の写真の超絶美形な青年が後ろに立ってました。

「ああ、今日は飲み会に誘われてココに来たんだよ。ホラ、あつち
の座敷だよ。おにいさんよりもおねえさんの方がよかったかな？」

仁さんが指さした方を見るとものすごい顔で睨んでくる10人くら
いの女の人たち。その中に男の人と同じくらいいるけど、そのうち
の2、3人が女の人と同じ顔で見てくるんですけど。
特にあのマツチヨの人マジで怖いわ。

「……………飲み会で大人気みたいですわ。私に迷惑をかけない

なら別にどっちでもいいですよ。」

「いやゝ、友達に好かれてるって嬉しいな。トイレに行こうと思ったらさ、たまちゃんを見つけたからつい声かけちゃったよ。明日会うつもりが今日もあえて嬉しいなあ。今はおにいさんでよろしく。」

「珠生ちゃんのお知り合いですかあゝ？」

「ウグツ！！！」

いち早く大河内ショックから抜け出し、私を押しつけてきたのはもちろんありさちゃんだ。

「いたい！！痛いって！！！！肘でみぞおちグリグリしないで！」

「私い、珠生ちゃんのお友達でありさつていいいますゝ。ありさつて呼んでください！！あっ！！お名前なんて言うんですか？」

「ちよつ、ほんと痛いつて！！！！あんただけ私のこと嫌いなもの！！！！」

私の上に乗るような形で、仁さんに話しかけるありさちゃんはひじや膝で私をどけようとぐいぐい押してくる。机の上に乗ってる食べ物もありさちゃんのせいで向こうに押されて落ちそうだ。

「ちよつと！！ありさちゃん痛いゝ！！それに食べ物落ちるう！！！！」

すると、私のわきの下に何かが入り体がふわりと浮いた。

「おおゝ、高い高い。」

目の前には超絶美形。目が合ったのでにつこりほほ笑み合う。

「帰ろつか。」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「これたまちゃんのカバンと上着だよ。お友達みんなお先にごめんね。たまちゃんは先に帰るよ。」

「えっ？ええ、なんで勝手に。仁さんのおともだちは？」

「俺は大丈夫だよ。おいみんな！！俺もう帰るから！！！！お金は今度払うから領収書よろしく！！よいしょっと。」

座敷のメンバーにそれだけ言うと、仁さんは私を小脇に抱えてさっさと出口へと向かう。

「ちよつ、ちよつとお！！待って下さい！！！！仁さん！！！！ってばあ。」

ありさちゃんの呼びとめた声に、出口へ向かっていた仁さんの足がぴたりと止まる。

「・・・・・・・・・・？」

「あつ！止まってくれたあ！！ありさうれしいなあ。」

「誰が・・・誰が俺の名前を呼んで良いと許可した？」

美形が怒ったら怖いですね。絶対零度の声と、般若の形相。居酒屋の中が凍りつきました。

[illegible]

29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708o/>

オオクニヌシノカミ様にお願い！！

2010年10月29日20時15分発行